

パネルディスカッション 「周産期における母性の育み」

パネリスト

橋本武夫「聖マリア病院母子総合医療セ

ンター所長 小児科医」

岡村博行「岡村産婦人科院長 産婦人科医」

岡野真規代「吉村医院」お産の家「助産婦」

川谷和子「子ども情報研究センター 育

児相談員」

指定討論者

小林昌廣「京都造形芸術大学 医療人類学」

松尾恒子「甲南大学 臨床心理学」

司会……高石恭子「甲南大学 臨床心理学」

司会 指定討論者として、お二人壇上に加わっていただいております。お一人目は京都造形芸術大学助教授の小林昌廣先生です。ご専攻は医療人類学で、本学の非常勤講師でもいらっしやいます。ご著書は、昭和堂から出されている『臨床する芸術学』その他、多数ありと伺っております。

それから松尾恒子先生ですが、本学文学部の教授で、ご専攻は臨床心理学です。本学において障害をもつお子さんのプレイセラピーを始められ、心理臨床活動の中心となっ

てその発展に寄与してこられた方です。ご著書としまして『母子関係の臨床心理』が日本評論社から出ております。ロビーで手にとっていただいた方もおられるかと思いますが、すでに八刷、もう一万冊売れていると伺っております。このテーマに関する世間の関心の高さといえますか、そういった意識も伺えると思います。

それでは、まず四人のシンポジストの先生方に、ご発表に補足されたいことがございましたら最初にお願しいたいと思つのですが、いかがでしょうか。

橋本 補足になります。最後に川谷さんがおっしゃいました母子が対と一緒に、ということですけれども、もつと大きくいうとこれは夫婦ですね。さきほど父性、母性という話が出てきましたけれども、夫婦が仲よいところでないと母性も父性もなかなか育っていきません。ベースはやはり夫婦、お父さんとお母さんが仲よくないといけないということも基本的にあると思います。これだけ補足させていただきます。

岡野 先ほど吉村先生のテープを聞いていただきましたが、普段はもつと過激なお産をおっしゃるんです。母子関係の出発点は自然なお産ということだったのですが、自然なお産をするためにはもつと前があると。くちやくちやなセツクスをしなきゃだめだ、と吉村先生がよく言われるのですが、ホルモン学的にも妊娠、出産、母乳というところは全

部セクシャルな部分だということをつけ加えておきます。

岡村 産後の一週間に激変をした若いお母さんの例を紹介いたします。二〇歳過ぎの、正式に結婚も入籍もしていない女性でした。茶髪で、タバコも吸っていました。検診には来ましたが、不定期でした。母親教室も一切受けませんでした。妊娠の前に受ける胎児胎盤機能の検査も、二回ともすっぱかされました。その後、痛んできたわけです。これはたいした痛みではなかったわけですが、一晩中非常にわめいてました。翌日の夕方に、いよいよお産が本格的になってきますと、それはますます激しくなってきたおなかを切ってください、切ってくださいというわけです。この後、子宮の収縮を和らげる薬を飲ませると少し落ち着いていました。

夜二二頃だったですか、「院長出てこい」とその妊婦のお母さんが怒鳴られまして、そのお母さんは以前のお産も何回か私の所でされたのですが、その時もやはりあっています。「母親に内緒でどうしてくれる。理由を言え」ということで、「もつこの子は二十歳過ぎて成人なのだから、いちいちお母さんの了解はつけなくていい」と伝えました。

しばらくして、娘の部屋に行って娘と大ゲンカです。母親はちようど三、四日後に胆石の手術を控えて別の病院に入院していたんですね。そこから夜抜け出してきたんですね。その病院に娘も入院させれば、一緒に入院できるじゃないかということ、どうもそこへ連れていきたいらしいんですね。娘の方は「絶対そこは嫌だ、私ここで生む」と言っていて、すったもんだして、あんまりいやいやいって、他の患

者さんも寝られないので、明け方とにかく様子を見て帝王切開しようということになりました。結局日が昇って帝王切開したんですね。翌朝目が覚めてみますと、ちゃんと部屋には哺乳瓶と大きなミルク缶が置いてあります。お母さんが、この病院は、ミルクをくれないからこれをやっておくようにと、娘に渡したようなんです。最初の二、三日ほどおっぱいが出ないうちは、看護婦さんも嫌がっていました。若い看護婦さんなんか泣きそうになっていました。「あの子、次もこの病院でお産するといったら先生絶対断つてね」とか、「今度うちでお産すると言われたら、私ももう辞めますよ」とか脅迫めいたことを言われたわけです。

ところが三日目頃からおっぱいが出だして、家内も時々行って世間話をしていました。急に態度が変わりましてね。いつも赤ん坊と同じベッドに寝ていました。いよいよ退院の時には、「先生、奥様どちらもこの私のわがまま許して下さい」と、「母もさんざん嫌味を言いましたけど、あれも許して下さい、この次も私はここで産したいと思えますのでぜひ絶対断らないでください。赤ちゃんは母乳で育てます」という置き手紙をして帰っていききました。その手紙を見て受付の子など感動して泣きだしました。そうは言っても、おそらくもう一週間もたつと、しんどいからミルクやめたとか、もう赤ん坊は母親に任せたとか、そういう言葉が出てくるのではないかと思っていたのですが、だんだん顔つきが変わってきて、とにかくかわいくていかんと言っているわけです。「先生この赤ちゃん、おへそかわいいでしょう」

とか、とにかくかわいくてたまらんといいことで、この頃は毎月一回の検診を楽しみにしています。本当に産後の数日間の、母乳をあげるという行為からそのような激変をした例です。まだ今、産後四、五カ月頃ですが、今後も見守りたいと思います。

司会 どうもありがとうございます。では今までの話を踏まえましてお二人の指定討論の先生からご質問及びコメントをいただきたいと思えます。まず小林先生、よろしくお願ひ致します。

小林 最初に、四人の先生方に共通した質問を一ついたします。非常に大きな質問ですが、先生方お一人お一人がお仕事の中で考えていらつしやる「自然」という言葉についてです。「自然」分娩という言葉もありますし、「自然」出産するとか、あるいは「自然」育つとか、「自然」という言葉は非常に「自然に」出てきてしまう表現です。ですから、医療の現場や福祉の現場でこういった言葉が使われますと、そこから先に言及できないところが出てくるかもしれない。「自然でしょ」といつてその先いけなくなりませぬ。つまり、その表現自体が不自然なわけです。そこで、お一人お一人の自然観と申しますか、自然ということについての考え方を短くお伺いしたい、と思えます。これから私が八分程しゃべりますので、その間にご回答の方お考えいただければ幸いです(笑)。

私は今、京都造形芸術大学という、最近では市川猿之助を副学長に据えた大学に勤めています。現在私は医療人類学の仕事をほとんどしておりませんで、大学にある舞台を使って何かできないかとか、制作系の学生と一緒に病院を美術館にしてしまおうとか、いろんなことをやっております。ただこちらの甲南大学でも身体表現研究とか、あるいは身体論といった科目を担当しております。最近こちらの大学の中井久夫先生が訳された『PTSDの医療人類学』という本がみずす書房から出ました。たぶん誰も訳さないだろうと思っていたら日本人が訳してしまつた分厚い本です。この本にも医療人類学という言葉がありますが、要は医療そのものを研究対象として、人類学的方法、つまりフィールドに出かけるとか、アンケートをとるとか、そういったアクティヴな方法によって医療全般を批判的に捉えるということですね、これが医療人類学の一つのやり方です。

医療人類学から身体論を通じて、舞台の仕事までということ、僕のなかでは、これは「肉体関係」という一言で尽きるんですね。ですから最近「ご専門は何ですか」と言われたら「肉体関係です」というふうに言っております(笑)。紹介いただくときにのように高石先生に申し上げればよかつたのですが、集まりの上品度がどのくらいかわからなかつたものですか。最初の河合先生のお話で初めから言つとけばよかつたなという、若干の後悔を残しております。

肉体関係の立場からすぐ大きな話を少しさせていただきます。フロンティアのシンポジウムは今回が第二回なんです。フロンティアの幕に「心の危機と臨床の知」という二つのコトバが並べられていますね。いてして今回の第二回のテーマは「現代人と母性」です。こちらの大学には文章心理学の専門の方もいらっしゃいますけれども、言葉を並べて特集というものを組む時は自然にパラレルになっているんですね。つまり「心の危機」というのは「現代人」にながって、「臨床の知」というのは「母性」につながる。そう解釈すれば、ほとんどこのシンポジウムの言いたいところは言えていると思うんですね。

つまり「現代人」は「心の危機」なんです。ですからこれについて考えるのは当然フロンティアだけでなく、すべての大学、すべての教育機関でやらなければいけないことです。そして「臨床の知」として「母性」がある。

母性というのは、本来、先ほどの質問にも関わりますが、自然であることとか、あるいは大地と宇宙とのつながりであるとか、そうしたことを重視するという発想があります。しかし一方で、非常に生理学的化学的な手法によって母性というものを捉えようとする立場も、当然あるわけです。そこで、その狭間で母性というものをより実りある捉え方をしようとする態度が「臨床の知」だと思います。

私は先ほど紹介いただきましたように、『臨床する芸術学』という変なタイトルの本をつくったんですけれども、その場合の「臨床する」というのは一つは現場主義ですね。現

場に降りていって芸術活動とか芸術現象というものをみていくというやり方。もう一つは、アナログな思考ですね。つまり、テクノロジーカルに何かを考えていたりその手法で制作していくというのは、例えばアートの世界では今コンピュータを使えばいいことはできる。ですから逆に、僕はコンピュータが使えない身体表現である舞踊とかダンスというものに興味をもっているわけです。

そういう意味でも、この「臨床の知」という言葉には、何かアナログであること、あるいは何か統一的なやり方とが便利であるといったことから離れるというモチベーションですね、それが期待されていると思います。それで、「母性」と「臨床の知」が結び付くだろうということで、まずこのシンポジウムの全体的なタイトルの説明は終わらせていただきます（笑）。

お一人お一人の説明というのはなかなか難しゅうございまして、ここは幸いうまく具合に男性の先生と女性の先生が同じ比率で、まあ司会は除きますけども、出ておりまして、そういう意味でも母性と父性というのがおそらく対照的に扱われているということは、証明できると思っています。ただ四人の先生方のお話を伺ってやっぱり父性は弱いな、河合先生のお話があっただけに、「どこにも父性はあらへんやないか」という感じがある、というのが僕の正直な印象でした。ただ岡村先生がお示しになったいくつかのお写真のなかに、お父さんの嬉しそうなお姿というか、これから大変だぞという感じのことを何か「こまかそうとし

ているような笑みといえますか(笑)、そういった姿というのをうかがえないでもなかったんですけれども。この父性という問題、先ほどの「自然とは何か」という大きな問題でなかなか短い時間でお答えにくいという先生方には、父性の問題をどういうふうにかこれから捉えていったらいいかという、これもかなり自然以上に大きいような気もするんですが、そちらに差し替えていただいても構いません。

先生方のお話は、やっぱり正直言って面白いことばかりで、いろいろ勉強になったことも多かったです。例えば普通通産婦さんは「お産」とか「おしも」とかという言い方をされますよね。お医者さんでも「お産」といういい方で、敬語の「お」を使うわけです。これは外国文化圏ではほとんどあり得ない使い方ですね。丁寧語なわけですが、そもそもこういう「お産」とか「おしもをとる」という言い方があることに、僕はある程度、日本の医療というのはまだ捨てたもんじゃなく、救いはあるなという気がするんです。つまり先ほど申し上げたように、完全にテクノロジーカルな医療というものになってしまっていますと、おそらくこれは「分婉」「出産」あるいは「会陰切開」と表現されることになる。けれども「育児」でなく、「子育て」といいますね。どこか開かれたというか、やわらかな、最近「しなやかな」という表現は使わないようにしていますが、表現によって医療の現場というものをより人間的にして、これから子どもと一緒に無限に近いぐらいの年月を暮らすのだという時間の濃密さを表現していると思います。

もう一方で、「お産」という言い方にはある種の儀礼的な匂い、雰囲気を感じられる。ですから、どこかで自然であることがいいという一方で、やはりそこは儀礼的あるいは非日常的な空間なわけですね。普通の分婉の場合には当然健康保険の対象になりません。けれども病院という世界そのものが、医療者にとっては日常的な空間ではあるかもしませんが、やはり一人一人の患者さん、妊婦さんにとつては非日常的な空間なわけです。そこで「お産」という言葉が出てくるというのが、お話を伺っていて印象深く思いました。

それと同じようなことは、昔は、もちろん僕が産まれる前ですが、あつたと思います。例えば子どもが産まれたときに、まだ男の人はそこに入れない時代を想定していただければいいんですけれども、「どつちだ?」と「だいたいどつちだ?」と聞くわけですから、まあ逆子かどうかだったかと方角を聞くわけじゃありませんか(笑)。そうしますと昔は、「お嫁さんですか、兵隊さんですか」と聞いていたと思うんですね、戦争前ですから。先ほど、軍事、兵隊という思想が出てきたから父性社会ができたという河合先生のお話がありました。まさに日本でも同じことで、「兵隊さんですか」というのは「男の子ですか」ということで、「お嫁さんですか」というのは「女の子ですか」ということです。当然、そういう表現があったということは、一面批判的に捉えなければいけない過去の歴史であるかもしませんが、どこかですでにある種の役割、性別の役

割でもいいですし社会的な役割でもいいんですけれども役割がどこか決められてきて、つまり一個の人間として見られてるんじゃないかな、というイメージがあるんです。

ですから、「お産」や「おしも」という言葉、あるいは「お嫁さんか、兵隊さんか」という日本独特の言い方は、ある種今の医療というものをアナログの方から、つまり「臨床の知」から捉え直すために有効だろう、ということをして四人の先生の話をもつてイメージしました。

医療人類学というのは、そもそも医療の現場におけるさまざまなイメージの相対化についての学問です。例えば、今僕は特にそのなかで言葉に注目して、言葉から医療イメージというものを抽出するというのを、非常に短い時間でですけどアクロバティックにやってみたんですが、医療人類学はそういうことを主にやっております。医療人類学という言葉だけではなかなかわかりにくいと思うのですけれども。

今回の四人の先生方のお話のなかで、例えば「生のエネルギー」とか、「生命のエネルギー」とか、「生命観」とか、そういう言葉が使われていました。あるいは「つながり」とか「接触」とか。こういう言葉は日常的に別に珍しい言葉ではなかったんですね。ただ医学、医療という空間に置かれると非常に違和感のある、ある種の文学的な表現だと思われてしまう。ところが今日、医療現場にいらっしゃる先生方はみなさんこういう言葉をくしくそそれこそ自然に、ナチュラルに使われているわけですね。ということは医療

も捨てたもんじゃないな、というのがやはり僕の印象としてはあります。つまり医療内部で、ある種の文学的これは本来医学哲学というジャンルでは非常に注目されている言葉遣いではあるんですね。医学哲学的な方向が出てきた。逆に哲学も最近「接触」とか「エネルギー」とかいうことに二十世紀になってからでも何度目かの注目をしているんですね。つまり哲学と出産時の心理学やあるいは接触についての考え方が結びついて新しい哲学が創られ始めています。そういうかたちで、それが医学でそれが哲学で、あるいはそれが医療人類学かという境界線はもうなくなっているんです。ただ今日のお話を伺っていると、最先端のお話と具体的なお話 専門家の方にとつては日常的なお話だと思っんですね、具体的なお話というのはとを結びつけることで何か新しい医学の哲学というものも私自身は感じました。ちょっとほめ過ぎかもしれませんが。(笑)

さきほど岡野先生の講演のなかで吉村医院の吉村先生のお話を録音テープで聞かせていただきましたが、この吉村先生には僕はぜひお会いしたいなと思いました。米倉齊加年似の声がたいへん結構で(笑)、たぶん性格的にも僕は合うんじゃないじやないかと、心を強くしました。僕は医療の専門としては、中国とか東南アジアの治療儀礼などを専門にフィールドしていたんですね、薄暗い畳の部屋を産室にしているというのは、台湾ですと全く同じ間取りで臨終室なんですね。これは生老病死がちゃんと円環的に

つながるといふ非常にアジア的な思想に　そんなに大きなことを一気に言ってしまったら河合先生に怒られるかもしれないけれども　つながっていると思いました。台湾でも中国でも病院は、もちろんちゃんとしたベッドで西洋的な方式なんです。ところが亡くなったあとに遺体を運ぶのは、畳が一段高くなっているところで、そこに遺体を安置して、そのまわりのところにみんなが集まって、飲み会はしません、お茶を飲んだりして弔いをする、そういう空間になっています。スライドで紹介していただいた「お産の家」が、それと全く同じようなレイアウトになっているというところにすごく感心致しました。みなさんスライドをたくさんご覧になったわけですが、僕もいちいち感動しながら、こんなことで泣いてはいけなそうと思いつつ、ちよつとつるつるしてしまつた。そのなかでも出産風景を写した一枚の写真、あるいは四枚連続になった写真で、お子さんが非常に表情が明るくなるというのが、素晴らしいですね。

われわれは、現実に今その出産に立ち会つてゐるわけでも、その赤ちゃんを知り合つたわけでもないんです。ところがここで、こういう物語が創られていくということは、医療を伝えていくなかで非常に重要なことで、例えばちよつと話題が離れますけども、大きな病気をした方とかあるいはHIV感染のようにかつては辛い経験をされた方というのは、自分の病気をうまく語れないんですね。自分を主体とした物語を構成することができない。それをたとえば医

療人類学者が手助けをして、病の語り　イルネス・ナラティブ　を行わせます。

病の語りをすることで、つまり言語化する、あるいは第三者に自分の病、自分の身体を伝えるということを通して、自分の病、ないし身体というものを客観化することが可能になる。今日のスライドの説明などを伺っていますと、それは病ではなくてむしろその逆にある健康な出産ということなんですけれども、そういうふうな風景を言語化する、物語化することでわれわれは出産を、新しい生の誕生を共有することができるようになるんですね。つまり、ここから始まるだろうということ、特に岡野先生のスライドを拝見して吉村先生の声を思い出しながら感じた、ということがあります。ちよつとほめ過ぎかもしれませんが（笑）。というのが私の意見で、そろそろお時間だと思えます。どうもありがとうございます。

司会　とても刺激的なコメントをいただきまして、何かスライドに映つておりました新生児のごとく、私の目がパーツと開いたような気持ちであります。早速ですが、本質的なご質問をいただきました。自然とは何か、あるいはそうでなければ父性とは何かということでも構わないということですが、少しお時間が押しておりますので、お一人、一、二分ぐらいでおまとめいただければと、司会としてはちよつと残酷な要求ですがよろしくお願い致します。

橋本

一、二分ではとてもまとまらない。ものすごく今大事なことをおっしゃって下さったと思います。三つのポイントがあって、一つは哲学です。医療に哲学が入ってきたという事。最近こういうのが出てきたといわれましてけれども、本来最近ではなくて昔からこういうものはあったんですね。あつたけれども、それをなかなか医者が取り入れようとしないう風潮が確かにありました。最近またエヴィデンス・ベースド・メディスンという言葉がありまして、情報をもとにした医学ということですが、本当の情報ならいいのですがそれが数報になってしまう。数値だけを元にしておかをやろうという傾向が出てきました。これは大きな問題です。情報というのは数ではない。心意気とかそういうものを含んだものを情報として取らないと、数だけを見ますとその数が本当に正しいかどうか分からない。例えば育児にしてもお母さんが育てた子ども達とあるいは保母さんに頼んで保母さんが育てた子ども達と、変わらないという情報もあるし、変わるという情報もあるんです。どっちが正しいか、非常に難しいところがあります。

育児はやはり科学、自然科学なんですけれども、体験という、ものすごく大きな因子が関わっていると思います。ですから両輪ですね、エヴィデンスと、体験とか感情とかそういうものが両輪として進められていかなければならない。片一方だけというわけにはいかない、というのがこれらの医療の進め方だと思えます。

それから自然という言葉、私の今日の話のなかではおそ

らく自然という言葉は出てこなかったとは思っていますが、私が考える自然、あるいは私がもし自然という言葉を使うのであれば、「生物学的当為」という表現でいいと思うんです。生物学的に当然の行為だということ、これが自然だと思えます。ですから、今日、お産で自然分娩という話がありました、これも今ちょっと問題がありまして、例えば開業医あるいは総合病院のお産が自然分娩ではなくて、助産婦さんとか吉村先生のところでお産が自然分娩、とそういう捉え方をしているところにちょっと一つ問題があります。吉村先生のところでも、あれは一応やはり管理なんです。お薬を使わない、使わないために、じゃあどういうふうにお産していくか。大きな意味では管理なんですよね。そういう意味で、今開業医の産婦人科の先生たちと助産婦さんとの間では助産分娩とか、病院分娩とかという言葉遣いがされておりまして、「自然」と「管理」という言葉で表されますけれども、それは間違いで、総合病院でも自然分娩を目指してやっているところもあるんですね。大きな意味ではどちらもやはり管理なんです。テクニク、技術が違つ、とそこは間違わないように理解しないとんでもないことになっていくと思えます。

それから父性という言葉がりましたが、これは一言でいえば私の名前みたいなものです。武夫、ということだと思つて、「武夫」は私が名づけられた時にはありふれた名前でした。ちょうど僕らが生まれた頃は「不如帰」で、武男と浪子の生き別れというのがありまして、簡単につけ

でもらったと思ったんですけれども、「武」というのは武士の武ですね。鉾を突き付けられたら逃げずに立ち止まれ、受け止めよ、ということなんですね。さつき河合先生もおっしゃいました。母性というもののなかにふたつの側面があるということ。それから父性について切断という言葉が今日、河合先生が使われました。切断、あるいは区別ですね。これは育児の中で父親の一つの役割だと思います。例えば善し悪しを教えるということも父親の役割であり、これも一つの父性だと思います。だから逃げずに立ち向かえ。母性というのは全てを受け入れなさい、ということだと今日河合先生はお話しされましたが、わかりやすくいえばそういう面ではないかと思えます。

もつとわかりやすく、というが大まかによく理解できるように言ったのが、アメリカのブラゼルトンさんという医師です。小児科の神経をやっている人です。その方がインディアン酋長の言葉を借りて父性と母性をはっきり言っています。日本でも「厳父慈母」という言葉がありましたね。インディアンで酋長がいったのは、「お母さんは、子どもを抱いてやさしさと平和を教えてあげなさい。お父さんは、子どもを天高くかかえて小高い丘の上に連れていき、世界はこんなに広いんだぞ」ということを教えてあげなさい」と、そういうことをインディアン酋長が言った。これも完璧ではないかもわかりませんが、ニュアンスとしては、父性と母性がよくわかる話ではないかと思えます。

岡村 産科医の一人としまして、自然に結びつく言葉だと思いますと、とりあえず自然分娩となるわけでございますが、私の今日お話ししたソフロロジー分娩法は、自然分娩というよりむしろ自律分娩、自分で自分を律する分娩法です。あからさまに自然分娩との違いを言えば、ソフロロジー分娩法はフランスの病院で生まれた分娩法でございますから、現代産科学の恩恵も自由にどんどん取り入れる、そういうかたちではないかと思っております。父性につきましては私はもっぱら母性で手いっぱい、とてもまだ父性まで及んでおりません。

岡野 そのあたりについては、一緒に働いている安田先生が会場にいますので、助けていただこうと思えます。いつも父性についてお母さん達に説明していただいています。

安田 吉村医院で働いています、産婦人科の安田と申します。今、小林先生が言われた自然ということについてどう考えるかということなんですけれども、僕自身はこれはもう勝手な考え方もしませんが、自然ということに関しては、例えば宗教的なもの、あるいはそこに哲学的なもの、芸術的なもの、その全てを含めてわれわれ人間が理解できない力を畏れるといいますか、あるいはそれに対して敬意を払うというか、謙虚になる気持ちというか、そういうものであると考えています。ガイア理論というのがありますが、自然というのは非常に矛盾したものであると思えます。そこ

に非常に矛盾があつてその矛盾のなかにある一つの調和というものがあるような気がします。答えになるかどうかわかりませんが、僕自身は自然に対する宗教的なもの、いろんなものを含めて人間もつと謙虚になつて命というものに対しての謙虚さが必要じゃないかと。命というのはただ単に生きているということではなくて、いわゆる雲なり水なり空気なりあるいは土とかそういうものも全体を含めて、原子を含めての命だと僕は考えています。自然自体が大きな命であり、それによつて生かされていると。人間の命は、自然の中の大きいなる力に包まれて、安心と畏れを感じつつ、調和して創造的にゆく、無意識工ネルギーの集合体のようなものだ。そして、お産はこのような命とそれを育む愛を受け渡す場だと思ひます。

時々妊婦さんにお話するんですけども、僕は父性というのは母子関係、母性をお母さんが発揮するためのもので母子関係を守つていくのが父性だと言つています。これはどういふことかと言ひますと、父性というのはひたすら教育的なもの、いわゆる子どもがある程度大きくなつていつて実生活において生活あるいは生存して行く、生き延びていくためのいろんな教育的なものを父性が教えていく、という面をもつてゐるわけですが、妊娠あるいはお産あるいは授乳、母乳を飲ませてゐる時期の父性というのは、その父性とはちよつと違つて僕は言つてゐます。どういふことか言ひますと、お母さんが赤ちゃんに向き合つてゐますか、母性を発揮するために父性が非常に大きな役割をして

いるということなんです。妊娠中あるいはお産の時にあるいはお乳を飲ませる時にお母さんが安心して、子ども、赤ちゃんに向き合えるということはどういふことかという、父親が子どもの世話をする、おしめを替えるとかあるいは赤ちゃんの沐浴するとかいふことではなくて、お母さんが父性によつて支えられるということなんです。そのやり方として、赤ちゃんを沐浴させるとか手伝うとかいふことがある訳ですが、一番大事なことはお母さんを愛して安心させること。それによつてお母さんがしつかりと赤ちゃんに向き合えることです。

赤ちゃんというのは非常に個性をもつてゐます。非常に扱いやすい赤ちゃんから非常に扱いにくい赤ちゃんまでいます。自然なお産をしたからといつてその赤ちゃんは扱いやすいかという決してそんなことはないわけなんです。これはその子どもの個性であつて一個の人間ですから、それにお母さんがしつかり向き合おうと思ひます非常に疲れるわけですね。ストレスがかかります。このお母さんをしつかり愛して支えるのが父性だつて。

先ほど岡野君が言ひましたけれど、僕はお産そのものを妊娠も含めて、非常にセクシャル、性的なものだと考えています。これははつきり言つて妊娠するということはセックスから起こるわけですね。最近では体外受精とかいろいろのがあります、これらが今後どうなるかちよつと僕は心配してゐます。元々セックスがあつてそこに妊娠とお産と育児というものがつながつてゐる。セックスというのは本

来は愛から始まっていると僕は思っています。だから本当の意味での妊娠、お産、育児というのは僕は愛というものを育み、伝え、それを残していくということではないかと思っています。ホルモンのことを言いますとまた時間がかかりますが、本当にセックスのと同じホルモンがお産の時にあるいは授乳のときに出てきています。これは全て愛情に関係しているホルモン、オキシトシンにしてもエンドルフィンにしてもプロラクチンにしても、これは全て愛情に関係しているホルモンです。ということは、僕は、自然のお産というのは、愛というものを育てて受け渡していく、人間としての人間が生き延びていくための戦略のように思えます。母性そのものがこの愛というものを伝えていくと。そして、それを守っていくのが父性だと僕は思っています。

川谷 先ほどフロアの方からすごく哲学的なお話をしていたいただきました。私自身が思う自然というのはやはりとて自分、二分ではまとめきれないぐらい大きなものだと思います。ただ私たちの日常は、あまりにも自然とかけ離れたところで生活をしています。そのなかで赤ちゃんは生まれ育つていくわけですが、赤ちゃんは生きていくためにものすごい欲求を出すということです。自然な育児というよりは、むしろ赤ちゃんが生きるための欲求に対して、それをどうお母さんが感覚的にとらえ受け入れていくか、どう関わっていくかということが、自然そのものの一つではない

かと思っております。

それから、父性というものに対しては、赤ちゃんとお母さんを外からの力に対していかに守るか、二人をどのように温かく支えるか、ということがあると思うので、そういった意味からお父さんのなかには『切り離す』だけでなく、『全体を包み込む』という母性的なものがあるのではないかと思います。ある意味で、お母さんも赤ちゃんの命と向き合う部分で、例えば熱が出たとき、『いつもと変わりない』、『この様子はいつもと違う。』では、家でしばらく見るのが病院に連れて行くのか、どうするのかということ在即座に判断しないといけないことがあると思うし、病気に限らず毎日の子育ての中にもあると思う。つまり『はつきり区切って判断していく』ということがお母さんにも求められるのです。だから、お母さんにも『包み込んでしまふ』だけでなく『区別していく』という父性的なものがあるのではないかと思っております。

小林 僕は大学の時、はじめはホルモンのことをやっていたんです。プロラクチンというホルモン、人間だけではなくかなり下等な動物にもあるんですね。魚にもあるんですね。魚ではプロラクチンは何やっているかというところ、もちろんおっぱいは出ませんから、浮袋の調節をしているんですね。これはやっぱり人間だと人生の浮き沈みかなとか(笑)。失礼致しました。

司会 ありがとうございます。できればこの調子で一時間くらいお話を聞きたい気分もあるんですが、残念ながら予定ではもう時間が来ているんです。参加されている皆さんのお許しがありましたら、十分ほどだけ延長させていただきます、もうひと方、松尾先生の方から指定討論の方をお願いしたいと思います。

松尾 指定討論者というより主催者の一人でございます。今日は多数、長時間お集まりいただきまして本当にありがとうございます。高いところからですけども一言お礼の言葉を申し上げます。それから遠方から、岡崎の方からお見えになっています。山口県の光市から梅田病院の院長さんと事務局長さんがいらしています。光市はおっぱい都市宣言というのをやった非常に母性的な都市であります。後で一言でもちようだいでければなと思っております。

それからもうおひと方、長い間少年鑑別所の所長をしておられて千葉大学の教育学部にいらっしやって、私どものところに非常勤でお見えになっておられます、上芝先生がお見えになっておられます。先生はたぶん父性的のことをお話いただけるんじゃないかなと思いつながら今の話を聞きました。

私は二十数年前、自閉的な傾向をもった情緒障害児の療育ということに携わっていました。その時に基本的に私がやってきたことはスキンシップなんです。お母さんに添

い寝をしてみようということです。いぶん自閉的なところから解放できたというふうに思っています。具体的な例については私の本に書いておりますので、見ていただければいいと思いますが、今日はちよつと省略させていただきます。

私が今日四人の先生方、あるいは河合先生のお話をうかがって感じたことを一言でいえば、「寄りそう」ということではないかと思っています。お母さんは赤ちゃんに寄り添いますし、赤ちゃんはお母さんに寄り添っています。それからお父さんも先ほどのように寄り添ってお母さんと赤ちゃんを助けてあげる存在になっていると思います。

最近いろんな凶悪な少年事件が増えておりますけれども、その少年たちはどの程度そういう父性的な、母性的な寄り添いというのを体験していたんでしょうか。もしかしたら、そういう父性的なあるいは母性的な寄り添いとか、少し少なかつたんじゃないかというふうなことも考えます。

自閉症の子どもの場合にはお母さんから改めて寄り添ってもらおうということ、ずいぶんと自閉から回復し言葉も出てきて、教室に座ることもでき、勉強もでき、社会生活を曲がりなりに営んでいけるところまで成長した子どもたちがおります。そこから、大きくなつて一生懸命やるんだつたら、産まれた時から寄り添ってもらつたらいいんじゃないかということ、産まれた時から寄り添ってもらつたらいいんじゃないかということ、橋本先生たちとお知り合いになれたということです。それからもう一つ、昔から添い寝という日本的な習慣があったので、自閉症の子どもにも添い寝をしてみようということをしました。小学校ぐらい

の子どももだつたら添い寝をしてもらつて本を読んでもらつたというふうなこともしました。ですから歳相応の寄り添い方というのがあるんじゃないかな、思春期でパニックを起こしたりしたような子どもたちでも何らかのかたちの寄り添いというのがあれば救われるかな、という気持ちももっています。

先ほどから動物行動学の話が出てきています。ティンバーゲンという人は動物行動学者ですが、先ほどのインプリンティングの研究で、ローレンツと一九八四年にノーベル賞を受賞した人です。そのティンバーゲンが抱きしめ療法というのを自閉的な子どもにやっております。そしてそれとかなりの子どもが回復できる。そして自閉症の原因については私は一切問いませんでしただけども、ティンバーゲンは、自閉症の原因はもしかしたら周産期にあるんじゃないかというふうなことも書いております。

それからもうひとつ紹介しておきたいのは、長い間お茶の水女子大学で発達心理学をやつてこられて、言葉の障害のもつ子どもの治療をされてきた田口先生という方がいらっしゃるんです。その先生ははじめは訓練をやつてたんですね、でもそのうちに気がついたことはこれは訓練ではだめだと、そして母子関係が原点となっている、「人（ヒト）関係」を育てないと言葉は覚えなれないということを長年かかつて気がついた。私ははじめから気がついておりましたけれども（笑）、そういうことを本に書いておられます。そして愛着をお母さんにもつということが全ての社会生活を営

める原点であるということと、それからそういう愛着を出発点にして回復を示した子どもというのは、普通の子どもが発達するのとよく似た状況で治っていくということを書いております。ですから私は、私がずつとやってきたことというのは間違いないかと思っております。

それからちよつとだけ一言、私も最近虐待の問題が増えてきておりますので、普通の子育てのなかでお母さんがストレスを感じて子どもを虐待する、その寸前の状態というのとはどんなのかというので、ここに来られてる先生方にもご協力いただいでこの阪神間で簡単なアンケート調査を致しました。三千人ぐらいの方にお配りして千二百人近い方から回答を得ました。そしてその中で自由記述というのを設けておりますが、七百人近い方が自由記述でいろんな育児のことを書いておられた。だから育児ということが現代のお母さんたちにとっては、大変重い問題になっているということがよくわかりました。その中で一つだけ取り上げておきたいのは、ご主人のご協力がある人はストレスは少ないということですね。それから家庭にいろんな不満をもっている方は、夫の協力が少ないことへの不満をずいぶん挙げておられます。そして、今日も写真で見せていただきましたが、出産に立ち会ったご主人は子育てにとても協力的だということがアンケートの結果からわかっています。

もう終わりますけれど、そういうふうなことで私は、やはり寄り添うということが今のIT革命とかいわれる時代に大切な、私たちが失いつつあることではないかというふ

うに思っております。

司会 どうもありがとうございます。今、お名前のあがっております先生方、もしよろしければ少しお言葉をいただければと思いますが。

梅田 山口県光市から参りました。光市では、ときどき母乳なんて宗教みたいなものだと言われることもあるんですが、なぜおっぱい都市宣言をしたかということをお話させていただきます。光市は行政ぐるみで、「母と子と父、そして人にやさしいまち・光」を目指し、おっぱい育児を応援しています。みなさん、光市をぜひ訪れていただきたいのですが、来られたとたんにみんなにすぐやさしいかというたら決してそんなことないんですね。やはり行政というのは一つの困いをつくってそこから始めるという、そういう手続が必要なんです。だから、みなさんもぜひ興味をもっていただきたい。みなさんが興味をもつことで、行政は動いていくわけです。

光市ではおっぱいということに取り組んでいるんですが、昔の日本をみると非常に自然にできている。たくさんの方が子どもを産んで、そして昔からの知識で母子を守ってきました。現代はそれがもうゼロに近い状態ですから、それで光市では、「サロン・ド・おっぱい」とか、「JBP教室（じじいばば、パパ教室）」ということをやっているわけです。家に帰って困っている産婦さんたちを守る一番の力はやはりおじいちゃん、おばあちゃんではないかと考えて、こう

いうことを行っているのです。みなさんも興味がありましたら、ぜひ一度光市というのをのぞきにきてください。

上芝 ご指名いただきました上芝でございます。非行少年をずっと扱ってきたということは今、松尾先生にご紹介いただきました。確かに扱ってたんですが、今日いろいろお聞きしたような微細なところまで少年鑑別所というのはなかなか調べられないんですね。先ほど凶悪な事件についておっしゃられていましたが、推測するところ、たしかにそういういた要因が小さい時にあるんだろっと思えますが、私ちよっと思われもってよく答えられません。そんな無責任なことと思われるかもわかりませんが、そういうところはなかなか家庭裁判所の調査官も調べてないのが実状です。

私が今日ここにお邪魔したのは、私はロールシャッハテストというインクのしみを使ったテストをもっぱら研究しています。そこで母子関係に問題のある人、あるいは問題のない人がどういう反応をするか、ということに関心をもっているからです。そこで果たして今日はどんな話があるのかと思って楽しみに来たわけです。簡単に申しますと、やっぱりそうかと思っただんですが、とにかくインクのしみというのにはさわりなくなるような材質感といわれるものがあります。それをまっとうに感じ得るかどうかというのが、小さい時の母子関係に支えられておるといふ理論があるんですね。今日聞いて、接触やセックスといったいろんな話を聞きまして、私たいへん勉強になりました。興味

のある方は、私いくらでもお話をしますので、また別の機会に申しさせていただいたらと思います。

北島 大阪府立母子医療センターの新生児科の北島と申します。今日の岡野さんに見せていただいた写真を見ていて、僕は母の自宅分娩の時のことを思い出したんです。妹たちが産まれる時の。ですからまさに今、現代の自宅分娩をやっていたらいい、産科の先生方がきっちり、あるいは助産婦さんがきっちりサポートされているんだなと思っただけです。すばらしい。だから全てがああいうかたちでできたらというような夢があります。どうもありがとうございます。

司会 ありがとうございます。司会の方の不幸でみなさんからご意見をいただいてまた壇上とのやりとりをしていただく、というお時間をどうしてもつくることができませんでした。また次の機会を楽しみにしていただくということとお許しを願えたらと思います。本日は現代と母性という大きなテーマで催した訳ですけれども、母性が自然そのものだということであるとすると、現代のIT、科学技術に支配された社会にありましては、自然である母性を女性が自然に育んでいくということ自体が、誰にとっても非常に難しいことなのだということを変更して自覚させられたように私は思っております。そのことは女性だけでなく男性にとっても両性にとつての大きな問題であるということ

を、河合先生の基調講演でもシンポジストの先生方からも話を伺えたのではないかなと思っております。何か結論を一つ出すということではなくて、今日はとても心の奥底、体の方から活性化されるようなとても刺激的なお話をたくさんいただいたと思いますので、これを各自で持ち帰ってまたそれぞれが温めながら日々の自分の生活に活かせていけたら、というふうに願っております。

本日はシンポジストの先生方、指定討論の先生方、本当にありがとうございます。もう一度拍手をお願いしたいと思えます。みなさまも遅くまでご参加いただきまして本当にありがとうございます。